

## 清酒製造労働者(杜氏・蔵人)の就業行動から見た清酒業界の再編動向 —佐賀県における「肥前杜氏」集団の事例を通して—

小林 恒夫

(海浜台地生物環境研究センター 環境社会学分野)

平成22年10月29日 受理

### Changes of the Business World in Sake Brewing at the View Point of the employed Behaviors of the Overseers of Sake-producing Operations

Tsuneo KOBAYASHI

(Laboratory of Environmental Sociology, Coastal Bioenvironment Center)

*Accepted October 29, 2010*

#### Summary

The business world of sake brewing was changed drastically from between world war II. Before world war II overseers of sake-producing operations are workers away from home. And they worked about 100 days in only winter. But now not a little of them go to factory every day from home. And they work through all season in a year. Through the world war II the number of overseers of sake-producing operations is overstuffed to the number of the factory of sake brewery. Therefore it is not easy to get the job for them. But after world war II, especially after high economic development, the number of overseers of sake-producing operations decreased rapidly, changed to shortage. So not a little women started to support to work in the sake-producing factory. And one more point of this paper is the relationship between Hizen-toji and regional agriculture. Namely, the agriculture is not developed at Uwaba-daichi before 1960s. But it developed rapidly after 1970s. So, not a little comparatively younger overseer of sake-producing operations shifted to chose the agriculture. This is an important point of the drastic decrease of the number of "Hizen-toji", the overseers of sake-producing operations from Hizen-cho at the northwest of Saga Prefecture.

**Key words:** overseers of sake-producing operations, Hizen-toji, Uwaba-daichi, work away from home, business world of sake brewing

#### I. 課題と対象

##### 1. 課題

清酒の国内消費量は第1次オイルショックの1973年をピークにそれ以降減少傾向に転じ、近年では焼酎ブームを背景に、2003酒造年度以降、焼酎のそれに追い越され<sup>1)</sup>、清酒業界はますます縮小再編を強いられている。このような清酒業界の動向に関する農業経済学・市場論分野からの研究は少ないため、例えば白武(2001)による地場産業・地産地消の視点からの再評価・活性化論や、齋藤(1999)によるフードシステム論からの理論的・実証的接近が参考となる。

しかし、白武(2001)は地場の酒米生産と清酒消費に関する分析は行っているが、地域就業機会の創出に関しては指摘のみに止まり、杜氏・蔵人の分析には至っていない。また齋藤(1999)は、清酒そのものの生産・流通・消費面だけでなく、その製造労働者である杜氏・蔵人の減少や性格変化にも言及しているが、その動態の中長期的な歴史的経緯までは検討していない。

そこで本稿は、杜氏と蔵人、なかでも杜氏の就業行動の中長期的な変化に注目し、その点を事例的に観察することを通じて清酒業界の再編動向を確認することを目的とする。すなわち本稿は、清酒業界そのものを直接的対象として考察するのではなく、清酒製造の担い手である杜氏・蔵人の就業行動の変化を検討することによって、間接的に清酒業界の再編動向を確認する作業を行いたい。

本稿が以上のような一種迂回的な方法をとる理由は、上述のように、これまで農業経済学・市場論分野の清酒業研究において、製造労働者である杜氏・蔵人を直接対象とした研究は多くはなかったと思われるからであるが、併せて、このような新しい切り口で清酒業界の再編動向を如何に把握できるかの試みを行うためでもある。そして最終的には、このような作業によって、清酒製造に関するこれまでの地場産業論ないし清酒フードシステム論を補完することを目的としている。

## 2. 対象

本稿では事例分析の対象を佐賀県としたい。その理由は、佐賀県が清酒の有力な生産地であると同時に有力な消費地でもあること、また県内に有力な清酒製造出稼ぎ者(杜氏)集団が存在することである。すなわち、佐賀県の清酒製成数量は1999～2002年度(4月～翌年3月)には九州内では福岡県に次いで2位であった。ただ、その後大分県が佐賀県を上回った(佐賀県が大分県を下回った)ため、2003～2008年度には佐賀県は3位に落ちている。また、清酒課税数量ではこの10年来、佐賀県は福岡県、大分県に次いで3位となっている<sup>2)</sup>。以上の諸点から、これら北部九州3県は清酒の手堅い産地であることが見える。さらに、2003年度まで1人当たりの清酒消費量が焼酎消費量を超えていたのは九州内では佐賀県のみであった<sup>3)</sup>。こうしてまず、佐賀県は生産・消費両面において清酒が比較的優越する地域であり、九州内で「清酒王国」という評価ができるとするならばその第一候補に挙げられる<sup>4)</sup>。

次いで、佐賀県内に「肥前杜氏」と呼ばれる有力な出稼ぎ酒造労働者(杜氏)集団が形成存続していることに注目したい。もとより九州内には、過去・現在における有力な杜氏集団として、メンバー数の多い順から、1975酒造年度には柳川杜氏、久留米杜氏、九州中央杜氏(以上は福岡県)、肥前杜氏(佐賀県)など12の杜氏集団が存在し、また2007酒造年度には、久留米杜氏、城島(三潞)杜氏、肥前杜氏など10の杜氏集団が存続している。そこで、本稿では、この「肥前杜氏」集団を取り上げることにしたい。

## 3. 概念定義と地名表現

清酒清造過程における製造責任者(親方)を「杜氏」と呼び、その他の一般労働者を「蔵人」と呼ぶことが多いため、本稿でもこの用法に従う。なお、蔵一(くらいち)とは蔵人の中の最上位の役柄であり、副杜氏とも言う。また一般的に、杜氏は同郷出身者からなる集団を形成するため、この集団を「〇〇杜氏」あるいは「〇〇杜氏集団」というように、出身地名を冠して呼ぶ。そして本稿の対象集団である「肥前杜氏」とは、佐賀県肥前町(現・唐津市肥前町)出身の杜氏仲間のことである。

一方、蔵の経営者を蔵元、蔵元の後継者を専務と呼ぶ。

市町村名に関して、本稿では主に佐賀県の事例を取り上げるため、佐賀県内の市町村名は県名を付けずに直接「〇〇市（町）」と表現し、佐賀県以外の地名には県名も付けることにする。

## Ⅱ. 佐賀県における「肥前杜氏」集団メンバーの就業行動

### 1. 調査杜氏の概況

2009酒造年度（7月～翌年6月）において「肥前杜氏」集団メンバー（現役杜氏）は5人であった。それに対し、引退杜氏は少なくない。そこで、現役杜氏の全員と、可能な限り多くの引退杜氏の調査を行った。表1はその結果である。そして、彼ら自身の就業行動と彼らが関係・遭遇した清酒業界の再編動向を年次的に示したのが表2である。なお、時期区分は、日本経済の労働市場全般の展開に関して一般的に使用されているものに従っている。

そこで本節では、これらの諸表に基づいて、杜氏・蔵人市場の性格変化、あるいはそれに伴う杜氏・蔵人自体の性格変化の特徴を時期区分に沿って検討していきたい。

### 2. 杜氏の就業行動

#### (1) 戦時期

高齢の引退杜氏の多くは戦時期に蔵人をしていたときに徴兵された経験を持っている。例えば、Aさんは1944年に戦地での清酒製造を命じられてビルマ（ミャンマー）の支社に出向いた。また、Dさんは伊万里市の田尻酒造場で蔵人として1冬酒造りをして実家に帰ってきた1943年の春に徴兵され外地（満州）にも出かけた。Fさんも学卒後、唐津市の東木屋酒造で酒・醤油

表1 調査杜氏一覧（2010年6月現在）

	杜氏 記号	年齢	出身 集落名	蔵人 年数	杜氏になった 時の満年齢	杜氏 年数	酒造り 年数	杜氏引退 満年齢	酒造りをした 酒造場数(延べ)
引退 杜氏	A	1899年生れ 享年58	星賀	14	31	26	40	57	9
	B	79	星賀	15	31	36	51	67	7
	C	75	星賀	26	42	22	48	66	6
	D	86	晴気	16	34	26	42	62	9
	E	75	晴気	37	45	5	42	60	9
	F	91	納所	21	39	33	54	72	6
	G	84	納所	24	40	34	58	74	7
	H	83	納所	30	47	14	44	61	8
	I	82	納所	27	38	32	59	75	6
	J	82	納所	24	32	20	44	64	7
	K	79	納所	23	38	17	40	56	3
	L	67	納所	9	26	19	28	45	3
	M	84	入野	12	30	48	60	78	2
	N	84	入野	13	29	29	42	69	9
	O	81	入野	16	31	12	28	43	6
	P	81	入野	15	37	34	49	72	10
	Q	75	入野	16	34	3	19	37	5
	R	86	田野	13	32	17	30	49	6
現役 杜氏	S	74	納所	25	44	30	55		5
	T	73	晴気	15	31	41	56		4
	U	71	晴気	17	33	38	55		6
	V	59	納所	20	35	23	43		8
	W	58	納所	26	56	3	29		5

表2 杜氏・蔵人および清酒業界の動向

時期	年次	杜氏の動き	蔵人（男女）の性格	杜氏が関わった酒造業界の動向
大正期	大正5 (1916) 大正7 (1918) 大正9 (1920)			
昭和 戦前期	昭和3 (1928) 昭和8 (1933) 昭和9 (1934)	Aさん入野村酒造従業員組合を結成 Fさん番頭に誘われて唐津市の蔵に入る		
戦時 期	昭和13 (1938) 昭和14 (1939) 昭和16 (1941) 昭和17 (1942) 昭和18 (1943)	Rさん杜氏の強い誘いで鳥栖市の蔵に入る Dさん杜氏に頼まれて伊万里市の蔵に入る Mさん杜氏に誘われて久留米市の蔵に入る Wさん知人の紹介で伊万里市の蔵に入る Iさん蔵人に誘われて福岡県の蔵に入る Nさん杜氏に誘われて久留米市の蔵に入る		
戦後・ 再編期	昭和20 (1945) 昭和21 (1946)  昭和22 (1947)  昭和23 (1948)  昭和24 (1949) 昭和25 (1950)  昭和26 (1951) 昭和27 (1952)  昭和28 (1953) 昭和29 (1954)	Gさん蔵人から誘われて福岡県の蔵に入る Gさん杜氏に誘われて長崎県の蔵に移る Kさん蔵人に誘われて唐津市内の蔵に入る Bさん集落の杜氏を頼って福岡の蔵に入る Nさん杜氏を頼って多久市の蔵に入る Jさん杜氏に誘われて鳥栖市の蔵に入る Nさん杜氏に誘われて伊万里市の蔵に移る Rさん杜氏に誘われて伊万里市の蔵に移る  Aさん入野村酒造従業員組合を再結成 Pさん知人に頼んで福岡県の蔵に入る Oさん杜氏に誘われて唐津市の蔵に移る Rさん強く頼んで伊万里市の蔵に移る Nさん杜氏に誘われて佐賀県内の蔵に移る Cさん集落の杜氏を頼って基山町に入蔵 Oさん杜氏に誘われて唐津市内の蔵に移る Qさん父親が杜氏に頼んで唐津市の蔵に入る Uさん父親が杜氏に頼んで佐賀県の蔵に入る		三養基酒造, 閉鎖
高度 成長期	昭和30 (1955)  昭和31 (1956) 昭和32 (1957)  昭和34 (1959) 昭和35 (1960) 昭和38 (1963) 昭和39 (1964) 昭和40 (1965) 昭和41 (1966)  昭和42 (1967) 昭和44 (1969) 昭和46 (1971) 昭和47 (1972) 昭和48 (1973)	Cさん久留米杜氏に頼って善導寺町の蔵に入る Eさん唐津杜氏に頼まれて天山酒造の蔵に入る Tさん父親が頼んで小城町の蔵に移る Pさん杜氏を頼って伊万里市の蔵に移る Iさん杜氏に誘われて伊万里市の蔵に移る Pさん杜氏に誘われて伊万里市の蔵に移る Oさん杜氏に推薦されて福岡の蔵に移る Lさん蔵人に頼んで久留米市の蔵に入る  Gさん杜氏に誘われて伊万里市の蔵に移る Qさん杜氏に誘われて福岡県の蔵に移る Lさん蔵人を求めている伊万里市の蔵に入る  Oさん江北町の蔵に杜氏として迎ええられる	福岡の蔵1人は地元通勤 伊万里の蔵3人は通勤 (うち女性2人) 鹿島の蔵に女性蔵人3人 鹿島の蔵で4-5人は通勤 江北の蔵で6人は通勤 小林酒造本店蔵2人通勤  甘木の蔵に10人の蔵女	津田酒造, 経営不振のため閉鎖  敬老酒蔵, 日仕舞いを片仕舞いに切り替え  佐賀県内9社合併, 後に解散  富安酒造, 2蔵を1蔵に統合・機械化 小林酒造本店第1蔵の杜氏は社員(工場長)  西日本酒造, 経営不振のため閉鎖 平田酒造など5社が合併
低成長・ 構造調整期	昭和49 (1974)  昭和52 (1977)  昭和56 (1981) 昭和57 (1982)  昭和59 (1984) 昭和61 (1986) 昭和62 (1987)  昭和63 (1988) 平成1 (1989) 平成2 (1990) 平成6 (1994) 平成12 (2000) 平成14 (2002)	  Jさん唐津市の蔵から杜氏として迎ええられる  Eさん事情により知人の杜氏を頼って蔵に入る  Oさん杜氏に頼まれて山下酒造に移る  Nさん鹿島市の蔵に杜氏として迎ええられる  Pさん伊万里の蔵から杜氏として迎ええられる Pさん西有田の蔵から杜氏として迎ええられる  Pさん鹿島市の蔵から杜氏として迎ええられる	大分1人は通勤蔵人     福岡の蔵に女性2人入る  鹿島では4人の通勤蔵人 (うち2人は年雇社員)  福岡の蔵で2人は通勤  大里酒造3人通勤蔵人	小林酒造本店, 機械化し2蔵を1蔵に統合 松隈酒造, 経営不振のため生産量を減らす 藤生酒造, 経営不振のため閉鎖 小柳酒造, 委託製造に切り替える  M酒蔵, 閉鎖 東木屋酒造, 酒造から転業  山口酒造, 業界不景気のため蔵を閉鎖



の販売の仕事をしていて、20歳になった1938年に徴兵されて中国大陆に出かけた経験を持つ。さらに、Mさんも、学卒後、福岡県久留米市の富安酒造で蔵人をしていて、20歳になった年に徴兵され、中国大陆や台湾に出かけた。Rさんも、学卒後鳥栖市の蔵に入り5冬酒造りをしたが、1944年には徴用を受け、1年間ほど国内任務に当たった。

このような状況下では、当然、清酒業界においては、一方では、後述する企業整備<sup>5)</sup>によって清酒製造量は減少したが、それでも杜氏や蔵人の数は絶対的に不足したと考えられる。

その結果、杜氏や蔵人は蔵の側から「誘われる」状況にあったと推測される。事実、表に見られるように、この時期の6つの事例すべてにおいて、彼らは杜氏や知人の蔵人に「誘われて」蔵入りしている。なかでも、昭和13（1938）年にRさんは「人手不足なので」という杜氏からの強い誘いで蔵入りしている。

## （2）戦後・再編期

第2次世界大戦直後は、すべての産業と国民生活が戦争によるダメージからなかなか這い上がれず低調だったうえに、植民地等からの引き揚げ者も増えたため、労働市場は過剰となった。清酒業界もその例外ではなく、杜氏・蔵人市場も過剰傾向を強め、買い手市場の様相を呈した。その結果、酒造りを始めたり継続したりするためには、何らかのつてを頼るなどして酒造場に就職しなければならない杜氏や蔵人も少なくなかった。

調査事例では、この間に確認された16件のうち、9件は杜氏や知人の蔵人に「頼まれて」蔵入りしたケースであったが、7件は杜氏や蔵人に「頼んで」蔵に入れてもらっている。その様子の一端を示すと、Pさんは学卒後しばらくして1950年に、蔵一をしていた集落内の知人に酒を一升持って行って福岡県内での蔵入りを頼んだという。また、Qさんは1953年に蔵人をしていた父親が杜氏に頼んで自分の代わりに息子（Qさん）を蔵に入れてもらったり、Uさんも1954年に別の蔵で杜氏をしていた父親が隣集落の叔父さんに頼んで叔父さんが杜氏を務めていた蔵に入れてもらったりしている<sup>6)</sup>。

## （3）高度成長期

昭和31（1956）年頃までは、杜氏を頼って蔵入りしたり、Tさんのように杜氏をしていた父親が頼んで蔵を移ったりというように、酒造従業者市場はむしろまだ買い手の方が優勢であったように見受けられる。しかし、昭和32（1957）年以降になると、高度成長が北部九州においても本格化し、農家の若手の多くが農外就業を選択して農業後継者が激減したため、酒造従業者をめぐる状況は売り手市場に変わったと見られ、杜氏に「誘われて」蔵入りしたり、蔵を移ったりする事例が多く見られるようになった。

## （4）低成長・構造調整期

清酒製造量がまだ増加傾向を示していた高度成長期にも、清酒業界の中ではすでに再編の動きが始まっていたが、低成長期になると、いよいよ清酒消費量自体が縮小傾向に転換したため、清酒業界内の再編はさらに促進された。ただ、そのような中でも杜氏・蔵人市場は高度成長期に引き続き「不足状況」＝売り手市場が続いたと推測される。その要因は、高度成長期に多くの酒造従業者、なかでも蔵人が酒造業からそれ以外の業界に職を替えていった結果、酒造従業者が絶対的に不足してきたためと考えられる。

そのような事情は、1977年にそれまで福岡県内の蔵の杜氏を務めていたJさんが蔵元から頼まれて唐津市の蔵に移ってきたり、1981年にDさんが呼子町の蔵の杜氏に頼まれてそこに移ったり、1988年以降、Pさんが伊万里市・西有田町・鹿島市の蔵元からそれぞれ頼まれて杜氏として次々に移ったりした事例から察することができる。

### 3. 蔵人の性格変化

杜氏や蔵人は彼らの出身地と彼らが勤める酒造場（蔵）の所在との関係で、「出稼ぎ型」と「地元型」の2類型に分けられる。前者は、出身地が酒造場から遠方に位置し通勤が不可能なため、住居移動を伴う「出稼ぎ」形態をとるものであり、後者は酒造場周辺で育成された杜氏・蔵人集団のタイプであり、「地杜氏」と呼ばれる<sup>7)</sup>。

日本三大杜氏集団<sup>8)</sup>を初めとするわが国の大半の酒造従業者集団は「出稼ぎ型」であるが、たとえば九州の杜氏集団の中でも、福岡県の柳川杜氏や佐賀県の鹿島杜氏などは地元出身者からなるため、「地杜氏」に分類される。それに対し、肥前杜氏は佐賀県北西部の肥前町出身者が佐賀県南部や福岡県の酒造場に出かけタイプであり、まさに典型的な「出稼ぎ型」の杜氏集団である。

さて、出稼ぎ杜氏はもちろんだが、近くに自宅がある地杜氏であっても、かつては酒造り期間中は「住み込み」で働き、自宅には帰らなかったという。つまり、「出稼ぎ杜氏」だけでなく「地杜氏」も冬の酒造り期間とともに「住み込み」形態で酒造りに当たったのである。それは、「出稼ぎ」であってもなくても、杜氏・蔵人の仕事が未明から開始されるため起床時間が早かったからである。しかし、戦後は、機械化に伴って起床時間が徐々に遅くなってきたため、通勤でも仕事がつとまるようになり、自宅に近い地杜氏の中には通勤形態をとる杜氏・蔵人（特に蔵人）も現れるようになった<sup>9)</sup>。

以下、このような事例をいくつか挙げてみたい。Qさんが昭和40（1965）年に近所の杜氏に誘われて福岡県嘉穂町の大里酒造に移ったとき、大里酒造にはQさんを含めて肥前町から6人の蔵人が行っていたが、地元からも1人、通勤形態で蔵人が来ていた。高度成長による人手不足状況下で、肥前町出身者だけでは蔵人が足りないため、通勤であっても地元出身者を採用したわけである。Eさんが1990年に杜氏として移った福岡県北野町の山口酒造でも、肥前町からの3人と長崎県（小値賀島）出身者1人と地元から1人の住み込みの蔵人のほかに通勤の蔵人が3人来ていた。一方、昭和41（1965）年にLさんが近所の杜氏に誘われて移った伊万里市の蔵でも通勤の蔵人（蔵男）が1人（他に通勤の蔵女が2人）働いていた。また、昭和42（1967）年にRさんが鹿島市の蔵の杜氏を務めたとき、肥前町から住み込みで3人の蔵人を連れて行ったが、地元からは4～5人の蔵人が通勤形態で来ていた。また、Vさんが杜氏を務めた鹿島市の馬場酒造では肥前町からの蔵人2人以外に地元から4人の蔵人が通勤で来ていたし、うち2人は年間雇用の社員であった。彼らこそ「地杜氏」（正確には杜氏ではなく蔵人であるが）の「鹿島杜氏」（前述）にほかならない。さらに、昭和46（1971）年にOさんが江北町の大隈酒造場で杜氏を務めたとき、肥前町から16人もの蔵人を連れて行ったが、地元からも6人の蔵人が通勤で来ていた。このようなことは大分県でも同様であり、1973年にHさんが宇佐市の坂本酒造場に杜氏として出向いたとき、肥前町の集落内から2人の蔵人を連れて行ったが、宇佐市の地元からも蔵人が1人通勤で来ていた。

次いで現れた新しい動きは、年間雇用の社員による酒造りである。いわば「社員蔵人」の出現である。従来、杜氏や蔵人のほとんどは冬場の季節労働者であった。しかし、戦後の酒造労働条件の改善の一環として、不安定な季節雇用ではなく安定的な年間雇用を求める声が高まり、年間雇用形態の社員が増加していった<sup>10)</sup>。たとえば、上述とダブルが、Vさんが杜氏を務めた鹿島市の酒造場では、1993年ごろ肥前町出身の蔵人2人のほかに地元出身の蔵人が4人いたが、うち2人は年間雇用の社員であった。また、2002年にUさんが杜氏として出向いた福岡県嘉穂町の大里酒造でも、肥前町出身の蔵人2人以外に地元出身の通勤の蔵人が3人いたが、うち2人は年間雇用者（「社員蔵人」）であった。

さらに見られた新しい動向は、女性蔵人（蔵女）の出現である。もっとも、一般に女人禁制とは言われながらも、労働力不足が起きた場合には、背に腹は替えられず、実際には古い時代からすでに女性も男性に混じって蔵人として直接酒造りの作業を担っていたと言われる<sup>11)</sup>。今回の調査でもその事例が見られた。例えば、昭和41（1966）年にLさんが蔵人として働いていた伊万里市の蔵には、肥前町出身の蔵人8人が住み込んでいたが、地元からは1人の蔵男と2人の中高年の女性蔵人（蔵女）が通勤で来ていた。また同年、Qさんが蔵一を務めていた鹿島市の蔵でも、肥前町出身の蔵人3人だけでなく、地元出身の蔵人として男性1人と主婦3人が来ていた。このような状況は福岡県でも同様に見られた。すなわち、1973年にCさんが福岡県甘木市の遠藤酒造で蔵一を務めていたとき、蔵人は肥前町からは4人が住み込みで行っていたが、地元からは中高年者を中心に女性パート蔵人が通勤で10人も来ていた。遠藤酒造の従業員の大半は女性だったのである。しかも、女性蔵人の仕事内容は男性蔵人と全く同じであったという。また1984年ころ、Eさんが懇願されて福岡県北野町の蔵に蔵一として移ったとき、肥前町の3人、小値賀島（長崎県）の1人、地元の3人の男性蔵人では足りなかったため、地元の女性2人も蔵に入ったという。

なお、女性蔵人の登場といっても、ほとんどが中高年の主婦であり、若手の新規学卒者であったわけではない。近年、少数ではあるが新規学卒、あるいはそれに近い若い女性が蔵人になる事例も全国的には出てきた<sup>12)</sup>。九州でも、現在、福岡県に2人、佐賀県、熊本県、宮崎県、大分県にそれぞれ1人、このような若手女性の蔵人・杜氏の出現が見られるという<sup>13)</sup>。佐賀県の事例とは、次の段落で述べるように、目下、Tさんの下で修業をしつつ将来「蔵元杜氏」になることを目指している女性蔵元の事例にほかならない<sup>14)</sup>。

さらに、近年、次に述べるような清酒業界の再編の中で、蔵元自身や蔵元の子弟（専務）、あるいは年間雇用の社員が、これまで長年出稼ぎ杜氏が担ってきた技術責任者の役割を担う事例が増えている。「蔵元杜氏」、「専務杜氏」、「社員杜氏」（「工場長」）の出現・増加である。従来の杜氏（技術責任者）のほとんどは出稼ぎの農漁家出身者であったが、このような新しいタイプの技術責任者は必ずしも農漁家出身者ではない。今回の調査でも、Uさんが1966年に福岡県宇美町の小林酒造本家に蔵人として移ったときに、Uさんが入った蔵の技術責任者は年間雇用の社員（工場長）であった。また、Tさんが現在杜氏を務める蔵の蔵元（女性）は目下Tさんから酒造技術を受け継ぐための修業をしており、将来「蔵元杜氏」となることを目指している。さらに、Sさんが現在杜氏を務める蔵でも、蔵元の後継者（専務）が酒造技術の習得を行っており、同様に「蔵元杜氏」を目指している。

いずれにしても、以上のような動きは、高度成長期に発生し、低成長・構造調整期に加速してきている。

### Ⅲ. 清酒業界の再編動向

#### 1. 戦時期——企業整備——

この時期には、政府による全分野への諸統制の一環としての企業整備が清酒業界にも大きな影響をもたらした。企業整備自体は昭和11（1936）年の「重要産業統制法」改正に端を発する1940年の「経済新体制確立要綱」に基づいて産業界全般において実施されたが、清酒業界においては、「政府による統制は生産量にとどまらず、原料米の使用量や精米歩合、汲水率などの製造面から、価格にまで至った」。その結果、「酒造家はさらなる経営難に追い込まれていった」<sup>15)</sup>とされる。

今回の調査では、Aさんがビルマ（ミャンマー）での酒造りを終えて昭和「二十一年五月引揚ゲ」<sup>16)</sup>してきたときに、3年前まで担当していた本社の富安合名会社の蔵が企業整備の対象に当たっていたため、そこでの酒造りが不可能なので退社して肥前町の実家に家族ともども戻ってきたという事例が唯一それに相当する。

こうして、当時の企業整備が中堅規模の酒造会社にも大きな影響を与えていたことが推察される。

## 2. 戦後・再編期——清酒業界の復興と伸張——

この時期は、清酒業界も戦時期の疲弊から復興を果たし、国民の平時生活への回帰に伴う清酒の需要増加に対して、生産量を伸ばしていった時期であるため、取り立てて問題となるような動きは見られなかった。全体として清酒業界が復興し、順調に伸びていた時期であることの証左と考えられる。

## 3. 高度成長期——すでに業界再編が開始——

高度成長期には清酒の需要はさらに伸びていった。しかし、清酒製造部門の経営内部においては、酒造場（経営体）の合併、複数の蔵を持つ蔵元の蔵の統合・集約、蔵の閉鎖、あるいは製造責任者を従来の出稼ぎ「杜氏」から通勤の社員（「工場長」）に切り替えるなど、すでに再編の動きが始まっていたことが注目される。

例えば、1963年には佐賀県内においてRさんが杜氏を務めていた前田酒造ほか9社が合併し、新たに春秋酒造という経営体に統合され、1973年には福岡県内においてCさんが蔵一を務めていた平田酒造ほか5社が合併し、新たに遠藤酒造へ衣替えするといった事例が見られた。

また、昭和32（1957）年に、Cさんが蔵人として働いていた福岡県善導寺町の敬老酒造は、それまで蔵人9～10人体制の「日仕舞い」で生産してきたのを、生産量を半減（「片仕舞い」）にして蔵人も減らしたため、Cさんはやむをえず次の年の暮れには久留米市の富安酒造に移ったという事例や、その富安酒造が昭和41（1966）年には、2蔵を1蔵に統合し、併せて機械化も図ったという事例が見られた。

あるいは、昭和30（1955）年には、Cさんが3冬蔵人を務めていた津田酒造が経営不振によって蔵を閉鎖したという事例や、昭和46（1971）年には、Dさんが杜氏、Eさんが蔵人を務めていた西日本酒造が経営不振等を理由に閉鎖されたという事例が挙げられる。

さらには、Uさんが昭和41（1966）年に小林酒造本店に蔵人として移ったときには、本酒造は2蔵を持ち、一方の蔵の杜氏は小値賀杜氏が務めていたが、もう1つの蔵は社員杜氏（「工場長」）になっていたというように、製造責任者が出稼ぎ杜氏から社員杜氏等の年間雇用者に移行しつつあるという業界再編の一端が確認される。

## 4. 低成長・構造再編期——委託製造や転業も——

わが国の清酒生産量（＝消費量）が最も多かったのは昭和48（1973）年だとされる。この年は第1次オイルショックの年であり、わが国の経済はこの年以降、高度成長が終焉し、1974年は戦後初のマイナス成長を記録した転機の年であった。こうして1974年以降、わが国経済は「高度成長期」から「低成長期」に入ったわけだが、「低成長期」の特徴は、それまで増加してきた多くの生活用品の消費が減少に転じた点であり、清酒もその例外ではなかった。

上述のように、まだ清酒生産量＝消費量が増えていた高度成長期においてすら、酒造場の合併や閉鎖等がすでに始まっていたわけだから、清酒生産量がいよいよ減少傾向に向かった「低



成長期」以降は、このような清酒業界の再編・縮小はさらに加速されたことが推察される。

調査結果からは低成長期以降には酒造場の合併の事例はうかがわれなかったが、蔵元の複数蔵の統合・集約、また清酒製造量の削減、あるいは蔵の閉鎖といった事例はこれまで同様に確認される。それらを挙げれば、福岡県宇美町の小林酒造本家はもともと蔵を2つ持つ中堅の蔵元であり、肥前町出身のUさんが昭和41（1966）年に蔵人として入った蔵の製造責任者は社員杜氏（工場長）であったが、その後昭和45（1970）年にUさんがその蔵の製造責任者（杜氏）を引き継ぎ、その4造り目が終わった昭和49（1974）年春に本酒造はこれまでの2蔵造りを1蔵造りに縮小し、併せて機械化も導入したため、杜氏も1人要らなくなった。そこで、やむなくUさんがその年の暮れには大分県の蔵に移らざるを得なかったことは先に述べたとおりである。また、基山町の松隈酒造が昭和52（1977）年に経営不振のため生産量を減らしたことに伴って、この蔵で2冬蔵人を務めたEさんがその年の暮れには福岡県の蔵に移ったことも同様の事例である。

さらに、この時期には、Bさんが杜氏を務めていた小城市の小柳酒造は1981年にそれまでの自社製造からアルコールメーカーへの委託製造に切り替えたため、Bさんは伊万里市の蔵に移って次の造りを行ったという事例も見られた。

また、この時期にも、蔵の閉鎖が3件確認された。すなわち、Jさんが杜氏を7冬務めていた藤生酒造は経営が思わしくないことから昭和52（1977）年に閉鎖されたため、Jさんはやむなく退社した。また1986年には、Nさんが杜氏を務めていた伊万里市のM酒造が閉鎖されたため、Nさんはその後自家農業に専従した。同様に、Uさんが長年杜氏を務めていた鹿島市の山口酒造も経営悪化を理由に閉鎖されたため、Uさんは福岡の蔵に移ったという事例が確認される。

さらには、この時期には、他業種への転業といった形態での清酒メーカーの対応も見られた<sup>17)</sup>。すなわち、Pさんは唐津市の東木屋酒造で10年余杜氏を務めてきたが、1987年に本酒造が駐車場経営に転業したため、その後しばらく自家農業に専従したというものである。

#### IV. ま と め

最後に、以上の考察を表3において整理し、まとめとしたい。すなわち、杜氏・蔵人市場と蔵人の性格の変化については、戦時中は兵役等によって男手が不足したため杜氏・蔵人市場は絶対的不足＝売り手市場であったが、戦後・再編期には戦時体制の解体に伴う労働力の過剰化と清酒需要の回復によって杜氏・蔵人の過剰化＝買い手市場化が進み、高度成長期には労働力の全般的不足化に伴って杜氏・蔵人も不足＝売り手市場化へ逆転し、その後今日に至る低成長・構造調整期には清酒消費量の減少にもかかわらず杜氏・蔵人の高齢化と後継者不足がそれ以上に進んだために杜氏・蔵人の不足は構造化したと見られる。

また、このような杜氏・蔵人をめぐる労働市場の量的側面の変化、なかでも高度成長期以降の彼らの不足状況の深化のもとで、蔵人の質的性格も変化を見せ始め、出稼ぎでない通勤形態（通勤蔵人）や季節雇用でない年間雇用の蔵人（社員蔵人）、および女性（蔵女）の出現、さらには杜氏においても伝統的な出稼ぎ杜氏ではない社員杜氏の出現が確認される。

そして、このような労働サイドの変化の一方で、清酒業界においては、消費量がまだ増加傾向を示していた高度成長期においても、各メーカーでは生産量の削減、製造蔵の統合、製造過程の機械化、さらには企業合併も進められ、一部は閉鎖に追い込まれるというように、業界再編がすでに始まっていた。その後、低成長・構造調整期に入り、清酒消費量も減少に転じると、

自社製造から委託製造への切り替えや転業といった事例も確認され、業界再編動向はさらに加速されてきていると見られる。

表3 杜氏・蔵人市場および清酒業界の再編の歴史的変化のまとめ

	杜氏・蔵人市場	蔵人の性格	清酒業界の再編
戦時期	杜氏・蔵人不足 (売り手市場)		
戦後・再編期	杜氏・蔵人過剰 (買い手市場)		
高度成長期	杜氏・蔵人不足 (売り手市場)	通勤蔵人の登場 女性蔵人(蔵女)の出現 社員杜氏の出現	生産量の削減 酒造蔵の統合 製造過程の機械化 合併 経営不振・閉鎖
低成長・構造調整期	杜氏・蔵人不足	通勤蔵人の増加 年間雇用の蔵人の出現	生産量の削減 酒造蔵の統合 委託製造への切り替え 閉鎖・転業

## 注

- 1), 2), 3) 国税庁ホームページ(2010)より。
- 4) 山本(1983)がかつて秋田県から佐賀県に至る清酒消費量の多い日本海沿岸地域を「日本海岸ベルト地帯」と呼んだ実態は今でも残っている。
- 5) 本文Ⅳ.の2.の(1)を参照。
- 6) 当初は、「むしろ父親が『息子を使ってやってくれ』と手みやげ持って杜氏のところへ頼みに行った」(菅間(1987), p. 7)という。
- 7) 篠田(1957)を参照。
- 8) ビーアンドエス(1996)に詳しい。
- 9) 秋山(1994)より。
- 10) その事情は石田(2000)が詳しい。
- 11) 石田(2000)や毎日新聞社(1967)などを参照。
- 12) その事情は石田(2000)が詳しい。
- 13) 朝日新聞(2008)より。ただ、熊本県と宮崎県の女性杜氏のいる蔵は焼酎専業蔵ないし焼酎主体の蔵のようである。なお、この記事において、大分県は人数のみの記載であるため、その内容は不明であり、また、鹿児島県は人数も不明となっている。
- 14) 西日本新聞(2007)、佐賀新聞(2007a)、佐賀新聞(2007b)、佐賀新聞(2008)を参照。
- 15) 青木(2003), p. 209。
- 16) 名古屋徳市翁頌徳碑(1957)より。
- 17) もちろん、転業も低成長・構造調整期に入ってから起こったことではなく、その前の高度成長期にもすでに発生していたことは、1973年に多久市の木下酒造が食堂経営に転業した事例から知ることができる。この実態については木下・西村(2000)を参照。

## 引用文献・資料

1. 秋山裕一(1994)『日本酒』岩波新書, p. 38。
2. 青木隆浩(2003)『近代酒造業の地域的展開』吉川弘文館, p. 209。



3. 朝日新聞（2008）（福岡版），2月10日付，p.28.
4. ビーアンドエス編（1996）『この酒この杜氏』新紀元社，pp.27-71.
5. 石田信夫（2000）『杜氏になるには』ぺりかん社.
6. 木下治夫・西村隆司（2000）『重要有形民俗文化財肥前酒造用具』大平庵酒造資料館，p.74.
7. 国税庁ホームページ（2010）<http://www.nta.go.jp/kohyo/tokei/kokuzeicho/tokei.htm>
8. 毎日新聞社（1967）『酒〈九州の灘・城島〉』毎日新聞社，p.132.
9. 名古屋徳市翁頌徳碑（1957）.
10. 西日本新聞（2007），3月9日付.
11. 佐賀新聞（2007a），4月2日付.
12. 佐賀新聞（2007b），4月22日付.
13. 佐賀新聞（2008），2月22日付.
14. 齋藤修（1999）『フードシステムの革新と企業行動』農林統計協会，pp.118-134.
15. 篠田統（1957）「西日本の酒造杜氏集団」『京都大学人文科学研究所調査報告』第15号，pp. 1-48.
16. 白武義治（2001）「地域経済の担い手である中小規模食品製造業の存在構造」中嶋信・神田健策編『21世紀食料・農業市場の展望』筑波書房，pp.185-188.
17. 菅間誠之助（1987）『酒づくりの匠たち』柴田書店，p. 5.
18. 山本茂（1983）「埼玉酒造業の地理的分布—地場産業研究(1)—」『地理学集誌』3，pp. 1-20.